

# 『西鶴諸国ばなし』に描かれた人間

畑本彩乃

ように述べている。

『西鶴諸国ばなし』は、貞享二（一八六五）年正月に刊行された、大本五巻五冊、計三十五話から成る西鶴の短編集である。外題は「<sup>八輪</sup>西鶴諸国ばなし」であるが、各巻の目録題には「<sup>近年諸国咄</sup>西鶴諸国ばなし」とある。「天下馬」とは江戸城大手門の下馬場の意である。ただし、作者は作品中で意味の説明は行っていない。恐らく、「天下馬」のように人を留めて話を聞いたという意味を込めたのだろう。かつて、『西鶴諸国ばなし』は怪異説話集と捉えられる傾向があった。後藤興善氏は「古今著聞集」と西鶴の説話（『西鶴研究』第貳冊、昭和十七年十二月）の中で、『諸国ばなし』と『古今著聞集』との関連を強調している。野田寿雄氏は『古典とその時代Ⅷ 西鶴』（三二書房、昭和三十三年）で、『伽婢子』とその他仮名草子の怪談説話集に倣って書かれた説話集としている。

このような研究の流れを受けて、岸得蔵氏は『西鶴諸国ばなし』が多くの素材や典拠を有することを明らかにした。岸氏は『西鶴諸国はなし』考―その出生をたずねて―（『仮名草子と西鶴』成文堂、昭和四十九年。初出『国語国文』昭和三十二年四月）で、次の

『西鶴諸国はなし』は、内題に「近年諸国咄 天下馬」、序のはじめに「世間の広き事国々々を見めぐりてはなしの種をもとめぬ」と記す。「天下馬」が果して「宇治大納言物語」の成立に倣いての銘ならば、『諸国はなし』の取材法は、内題と序の冒頭に端的である。旅人をとどめて咄を求め、あるいは自己を旅せしめて種を拾ったのである。約せば見聞の二字に尽きる。勿論そうした単一な公式で『諸国はなし』が割りきれるわけでは決してない。しかし研究の視点は、『剪燈新話』『伽婢子』等、先行する内外の典籍との比較研究を試みる以前に、先ずここに定めるのが、作者の言に忠実であり、且つ至当と言うべきであろう。

岸氏は他の作品との比較ではなく、原拠を重視するべきだと考えたのである。岸氏以降、典拠論が盛んに行われるようになり、その中から作者の創造性についても言及されるようになった。例えば、『富士昭雄氏「諸国はなし」の方法』（『西鶴と仮名草子』笠間書院、平成二十三年。初出「西鶴諸国はなし」『国文学 解釈と鑑賞』三十四巻十一号、昭和四十四年十月）は、次のように指摘している。

『諸国はなし』には笑話的要素が濃いことはすでに述べたごとくであり、怪異小説としてはばかりでなく、笑話文学としての面からも座標を定め直すべきで、広く説話文学の系譜の中でその特異性を論ずべきであると思う。(中略)『諸国はなし』は「大下馬」と題したところから西鶴の独自性が始まる。怪異説話に笑話を加えた素朴な外見に、現実社会の人間達に、鋭い時には冷徹なまでの洞察の眼を注いだ内容をあわせて、雅趣溢れる文体で描き切る西鶴の魅力は語り尽くせぬものがある。

笑話要素に加えて、西鶴の冷静な観察眼が光るのである。また、江本裕氏は、『西鶴諸国はなし』と伝承(『西鶴研究—小説篇—』新典社、平成十七年。初出『伝承文学研究』第十七号、昭和五十年三月)で以下のように述べる。

『諸国はなし』において作者西鶴は、自己の作品の場所を始めとして、細かなことにまで充分の配慮をし、それを、読者をも参加することのできる共通の場とした。同時に、その場を作者独自の世界へ飛翔する契機とし、今までに見られなかったユニークな作品に形象した。(中略)西鶴の作品を検討するには、概括的な規定をする前に、個々の作品のありようを更に細かく検証する必要があるのではないか。

西鶴は作品を作者と読者の共通の場としたうえで、独自の世界観を注入したという。加えて、『西鶴諸国はなし』の研究に際しては、全体を見る前に個々の作品に焦点をあてるべきだとしている。

井上敏幸氏「『西鶴諸国はなし』攷—仙郷譚と武家物—」(『国語国文』昭和四十二年十月)も、典拠の指摘から西鶴の創作方法に言及がぶ。

この手法、いいかえれば、原拠の説話の型のみとり出し、その型を採用することで、自在に自己の世界を創出するという手法は、『諸国はなし』一篇を貫く基本的手法だったといっているのではあるまいか。(中略)ところで、こうした原拠離れの手法の中に西鶴の創作意識が伺えることを見落としてはならない。

西鶴は原拠の型を採用しながらも、典拠から距離をとりたがったとしている。また、西鶴は読者周知の素材を用い、先行の笑話本が啓蒙・教訓として使用した典拠を、一般的常識として踏まえて創作を行ったとされる。

以上の研究史をふまえつつ、本稿では二話を取り上げて主題を考察し、『西鶴諸国はなし』の性格を論じたい。

## 二

まず、巻三の五「行末の宝舟」を見ていきたい。「行末の宝舟」は信濃国で起きた不思議な話であり、「人間程、物のあぶなき事を、かまはぬものなし」という一文から物語は始まる。

信濃の国に暴れ者の根引の勘内という者がいた。ある日、勘内が人々の忠告も聞かず氷った湖を渡ったところ、氷が溶けて勘内は溺れ沈んでしまった。

同じ年の七月七日の暮れに、湖から大勢の見慣れない人を乗せた光り輝く船が現れた。高い玉座には死んだはずの勘内が、昔とは比べ物にならない立派な姿で座っていた。勘内は昔使われた親方のもとへ行き、湖で溺れた後竜宮の都に流れ着いたこと、都で大王の買

い物係として金銀を自由に使っていることを話した。また、彼は竜宮の素晴らしさを語り、陸地に戻ってきたのは盆祝いの買ひ物が理由であることを明かした。

勘内の話に目が眩んだ者たちは竜宮行きを望み、親方を含む七人が勘内と共に竜宮に行くことになった。船に乗り込む際、突然一人が分別して乗船を断ったが、残りの者は船と一緒に沈んでしまった。

その後、十年余りが過ぎても、誰も湖から帰ってはこなかった。一方、行かなかつた一人は長生きをしたというのがあらずじである。

「行末の宝舟」については、先行研究において数々の典拠が指摘されている。以下は、典拠の一つとして『伽婢子』「竜宮の上棟」を提唱する堤精二氏の「『近年諸国咄』の成立過程」(『近世小説研究と資料』至文堂、昭和三十八年)である。

これまで、西鶴の小説技法を考慮に入れながら、「近年諸国咄」成立の契機として「伽婢子」が重要な位置をしめる事を「雲中の腕押」「面影の焼残」「大晦日はあはぬ算用」の三話を例として述べてきた。(中略)そのほかにも「近年諸国咄」巻三の五「行末の宝舟」が「伽婢子」巻一の一「竜宮の上棟」との間に関係が考えられよう。

ここで、「竜宮の上棟」のあらずじを簡単に説明する。永正年中に、江州勢多の橋付近に住む真上阿祇奈という者がいた。ある日の夕暮れ、彼のもとに竜宮の使者が訪れ、真上と一緒に竜宮に行くことになった。彼が竜王に謁見すると、竜王は新しい宮殿の棟上げを祝う文を書いてほしいと真上に頼んだ。真上が書き上げると、竜王

は大喜びして盛大な宴を催した。作中では主に、竜宮世界の様子や地上世界と異なる人々の姿が描かれている。

本稿では堤氏説を前提とした上で考察を深めることにする。まず、典拠とされる「竜宮の上棟」と「行末の宝舟」を比較する。「行末の宝舟」には「竜宮の上棟」と近似する箇所が存在する。以下に「竜宮の上棟」と「行末の宝舟」で類似する箇所をそれぞれ引用したい。

#### 「竜宮の上棟」

しばしのおひだに宮門にいたり、馬よりおりて立たり。門をまもるもの共は、蝦魚のかしら、螃蟹の甲、辛螺・貝蛤の殻に似たる甲の緒をしめ、鍮・長刀を立ならべ、きびしく番をつとむる。真上を見てみなひざまづき、頭を地につけてうやまひつしめり。

#### 「行末の宝舟」

めしつれし者ども、何とやら磯くさく、かしら魚の尾なるもあり、螺のやうなるも有。万の買物をもたせ出行時

引用部分は、「竜宮の上棟」では真上の見た竜宮の守衛の描写であり、「行末の宝舟」では勘内が引き連れた手下の描写である。どちらも人間とは違う異形の者たちである。竜宮世界の描写から、竜宮世界が異世界であることがはっきり分かる。

次に、目録見出しの題名下の「無分別」という語について考える。これに関して、井上敏幸氏は「西鶴文学の世界―中国文学とのかわり」(『講座日本文学 国文学解釈と鑑賞別冊』昭和五十三年一月)で以下のように述べている。

ところで私は、「行末の宝舟」一篇の主題は、「紫女」における

「夢人」と同様に、目録見出しの「無分別」であったように思う。「無分別」は、おそらく根引の勘内の口車にのせられた親

方以下六人の行為に対していわれたもので、それは冒頭の一句「人間程物のおぶなき事をかまわぬものなし」の教訓的訓示と一致しているからである。一見無分別ものは主人公根引の勘内のごとくであるが（中略）人の制止をもちかず氷上を渡ろうとして死んだ勘内は、もともと「哀と申はてぬ」の一言で片付けられる人物であった。とすれば、この一篇の主題である人間の「無分別」さへの警鐘は、竜宮の女と金の話にのせられた親方以下六人の者の分別のなさに向って集中されていたといわねばならない。

井上氏の述べるように、「竜宮の上棟」における「無分別」との目録見出しは主題に関係すると考えられる。ただし、傍線部のように、「無分別」の対象を親方以下六人のみとする考え方には疑問が残る。改めて「無分別」が指すものを考えてみたい。

「無分別」は、一つには井上氏の指摘の通り親方たちを指すだろう。次の引用は、親方たちの行動とその結果をめぐる描写である。

「あの国の女の、いたづらを皆く、見せまじい事じや」といふ。「それはなる事か」といへば、「それがしのま、なり。十日計の隙人にして御越あれ。しろがね銭を、ふねに一ぱいつみてまいらせん」と申せば、「我はつねくのよしみ」人よりは念比した」と行事をあらそひける。親方をはじめ、その中に七人、伴ひける。取残されし人、是をなげきしに、耳にも聞きいれず。（中略）「さらばく頓」といふまもなく、舟は浪間に沈み、それより十とせあまりも過ゆけど、たよりもなく、「踊

を見に」と、歌にばかりうとふて果ぬ。

勘内の話を信じきった親方たちは竜宮行きを争い、人々の声を無視して船に乗り込んだ結果、一度と地上に戻るができなかった。勘内の甘言に目が眩んで話を鵜呑みにしたこと、周囲の注意を無視して利欲に走ったことから、彼らは無分別者であるといえるだろう。無分別な言動ゆえに、彼らは自らを死に追いやったのである。

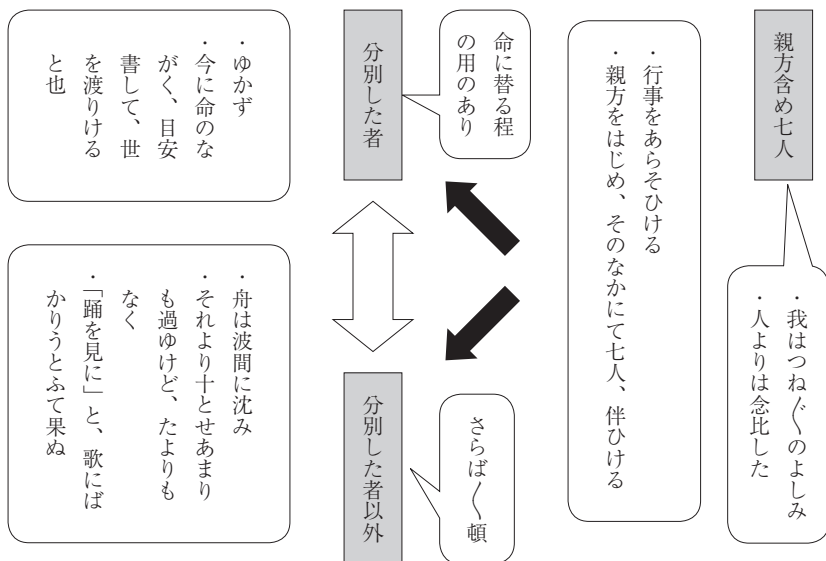
「無分別」者は根引の勘内をも指すと考える。次の引用は、勘内の行動とその結果の描写である。

此里のあばれ者、根引の勘内といふ馬かた、まはれば遠しと、人の留るにもかまはず、我こゝろひとつに渡りけるに、まん中過程になりて、俄に風あたゝかに吹て、跡先より氷消て、浪の下にぞしづみける。

忠告を無視して危険な氷の湖を渡ったところ、氷がとけて勘内は沈んでしまった。井上氏は親方たちのみとしているが、自分を過信する勘内の言動は、親方たちと同様に無分別であると言えるだろう。目録見出しの「無分別」は、根引の勘内と親方たちを指すのである。

さて、ここからは親方たちの、勘内の話を聞いた後の行動を詳しく見ていくことにする。勘内の話を信じ込んだ親方たち七人は船に乗り込むわけであるが、一人だけ心変わりした者がいる。【四一】は、彼らの乗船する前後の行動を図式化したものである。

二手に分かれる黒矢印の右側までは、分別した男とそれ以外の者たちは同じ言動であった。ところが、乗船する時になり、分別した者は「命に替る程の用のあり」と乗船を断った。その結果、男は長



生きをすることができた。一方、最後まで欲に走った親方たちは舟と一緒に沈み、二度と戻ってこなかった。乗船するか否かが両者の運命を隔てたのである。【図一】から、両者の行動とその結果は対照的であることが分かる。

ここでひとつの疑問が浮上する。仮に、本話で無分別者が向かう末路を呈したいのであれば、勘内と親方連中で事足りただろう。わざわざ分別した男を登場させなくてもかまわない。何故、西鶴は竜宮行きを断った者を登場させたのだろうか。

それは、分別を取り戻した者を描くことで、分別が運命の分岐点に大いに関わることを示すねらいがあったからではないか。分別した者は長生きし、己の欲望を貫いた者は帰還しなかったという二つの描写を入れることで、分別の大切さを読者に悟らしめているのである。

以上の考察から、「行末の宝舟」は煌びやかな竜宮の都を題材にすることで、私利私欲に走る人間の愚かさを誇張していることが分かる。また、途中で我にかえる者の描写を入れることで、分別の有無が招く結果を対照的に示している。

西鶴は物語の冒頭に、「人間程、物のあふなき事を、かまはぬものなし」と記している。この一文は、西鶴が最も主張したいことではないか。西鶴は登場人物たちの言動から、「無分別な言動は身を亡ぼす」ことを物語を通じて読者に知らしめる。西鶴は物語を面白く読ませながら、読者への教訓を間接的に込めたのである。「行末の宝舟」は、笑いの要素に力点を置きながらも、教訓性を帯びた中世の説話と形の異なる説話といえるだろう。

前章では、「行末の宝船」における「無分別」という目録見出しが作品の主題に深く関わることを示した。ここからは卷三の四「紫女」を検討する。「紫女」は、多くの研究者が典拠の究明を進めてきた一篇であるが、研究の大半が典拠論に傾斜し、「紫女」そのものをどのように読み解くかについてはあまり語られていない。

あらずじは以下である。世俗を嫌い、仏道修行に励む伊織という者がいた。冬の初めのある日、伊織のもとに女が現れる。女が訪れるような場所ではないため伊織は訝しく思うものの、女の扇情的な様子に惹かれて契りを交わす。二人はその後毎晩契りを交わすが、二十日も経たないうちに伊織はやつれ果ててしまう。彼の様子を不審に思った医者は、伊織から事情を聞き、女の正体は紫女で、すぐに退治しないと手遅れになると伊織に告げた。医者言葉に正気を取り戻した伊織は、その夜現れた女を刀で斬りつける。女は姿を消すが、その後も伊織に執心した。そこで、国中の仏道修行者を集めて弔ったところ、紫女は退治され伊織の命は助かったというのがあらずじである。

さて、「紫女」が浅井了意作『伽婢子』『牡丹灯籠』をふまえた作品であることを最初に指摘したのは、野田寿雄氏「西鶴諸国ばなし」である。次の文章は、その中の引用である。

女は橘山の奥深く消えたという「紫女」の話は、「伽婢子」の「牡丹灯籠」に共通するものがあり（中略）こういう話は偶然一致したものか、あるいは西鶴が「伽婢子」の話を変更したものか、よく分らないが、彼が「伽婢子」にヒントを得、それか

ら新しい話を創作したということも考えられないではない。彼らは後の作品によくこういう手法を用いているからである。とにかくこの「西鶴諸国ばなし」と「伽婢子」との関係は案外に深く、特に注目せられるところである。

「牡丹灯籠」の梗概は以下の通りである。妻に先立たれた荻原新之丞は、沈んだ気持ちで日々の生活を送っていた。盆の晩、人気の少ない通りに女の童を連れた美女を見つめる。女は新之丞に声をかけ、新之丞の家で一夜を過ごすことになる。その後も、女は新之丞のもとを訪れ、二人の契りは続いた。ある日、隣に住む翁が偶然新之丞の部屋を覗くと、新之丞の近くには骸骨が座っていた。驚いた翁は、このままでは女に命を奪われてしまうと新之丞に告げる。新之丞が女の住むという寺を訪ねると、そこには霊殿があり、近くには伽婢子が置かれていた。新之丞が修験者から渡された護符を使うと女は現れなくなった。それからしばらくして、新之丞は酒に酔って女のいる寺に立ち寄ってしまった。突如女は姿を現し、新之丞を寺中に引き入れてしまい、後日新之丞は女の墓の中で白骨の状態で見つかるのであった。

「牡丹灯籠」と「紫女」を比較すると、構成はよく似通っているが異なる点も存在する。それは主人公の描写である。以下は、それぞれ的主人公が女に会う以前の暮らしの描写である。

「牡丹灯籠」

近きころ妻にをくれて、愛執の涙袖にあまり、恋慕のほのほむねをこがし、ひとりさびしき窓のもとに、ありし世の事共思ひつゞくるに、いとかなしさかぎりもなし。「聖霊まつりのいとなみも、今年はとりわき此妻さへ、なき名の数に入れる事

よ」と、経よみ、ゑかうして、つゐに出てもあそばさず。友だちのさそひ来れども、心たゞうきたゞず、門にたゞみ立てうかれおるより外はなし。

「紫女」

磯くさき風をも嫌ひ、常精進に身をかため、仏の道のありがたき事におもひ入、三十歳迄妻をも持ず、世間むきは武道を立、内証は出家ごゝろに、不断座敷をはなれ、松柏の年ふりて、深山のごとくなる奥に、一間四面の閑居をこしらへ、定家机にかゝり、二十一代集を明暮うつしけるに

「牡丹灯籠」では、新之丞は妻に先立たれ孤独な毎日を過ごしている。友達の誘いにも応じず、妻の面影を想つて呆然とする様子が描かれている。一方、「紫女」では、伊織は仏道修行に励み二十一代集を書写し続ける様子が描かれている。新之丞は心に空白が生じているが、伊織は欲望を絶ち理性を保っている。西鶴が伊織の性格をこのように造形した理由は何か。それは女の誘惑が鍵になる。以下は、女たちが男を誘う場面である。

「牡丹灯籠」

前になり、後になり、なまめきけるに、一町ばかり西のかたにて、かの女うしろにかへり見て、すこしわらひていふやふ、「みづから人に契りて待わびたる身にも侍べらず。たゞこよひの月にあこがれ出て、そゝろに夜ふけがた帰る道だにすさまじや。をくりて給かし」といへば、萩原やをらす、みていふやう、「君帰るさの道もとをきには、夜ふかくしてびんなう侍べり。それがしのすむところは、塵つかたかくつもりて、見ぐるしげなるあばらやなれど、たよりにつけてあかし給はゞ、宿か

しまいらせむ」とたはふるれば、女うちえみて、「窓もる月をひとり詠めて、あくるわびしさを、うれしくもの給ふ物かな。情によはるは人の心ぞかし」とて立もどりければ

「紫女」

物の淋しき突揚窓より、やさしき声をして、「伊織さま」と名をよぶ。女の来る所にあらねば、不思議ながら、有様をみれば、いまだ脇あけしきぬの色、むらさを揃へて、さばき髪をまん中にて、金紙に引むすび、此美しき事、何ともたとへがたし。是を見るに、年月の心ざしを忘れ、只夢のやうになつて、うつゝをぬかしけるに、此女、袖より内裏はごいたをとり出して、独はねをつきしに、「それは狸突か」と申せば、「男もまたぬ身を、姫とは人の名を立給ふ」と、切戸おし明てはしり入、「誰でもさはつたら、つめる程に」と、しどけなき寐姿、自然と後むすびの帯とけて、紅ゐの二のもののかに見え、ほそ目になつて、「枕といふ物ほしや、それがなくば、情しる人の膝がかりたい迄。あたりに見る人はなし、今なる鐘は九つなれば、夜もふかし」といふ。

「牡丹灯籠」では女が新之丞に、「紫女」では女が伊織に、色仕掛けで迫る。「牡丹灯籠」では、女は「夜道が怖いので送ってほしい」と婉曲的に誘う。女の誘いに感化され、新之丞は積極的に家に招こうとする。一方、「紫女」では女の色仕掛けが強烈に描かれている。特に、傍線部「切戸おし明てはしり入」「しどけなき寐姿」「枕といふ物ほしや、それがなくば、情しる人の膝がかりたい迄。あたりに見る人はなし、今なる鐘は九つなれば、夜もふかし」といふは、いかにも直接的な誘いであり、情事に向かわせていることが明白で

ある。西鶴が女の誘惑をこれほど大胆に描いたのは、伊織の心理状態と関係があるのではないか。

新之丞と伊織はどちらも、女の魅力に骨抜きにされてしまう。しかし、二人の境遇は大きな隔たりがあるものであった。

【図二】は、男主人公が女に出会う前の心理状態と女の誘惑を暗示したものであり、矢印は女に魅了された原因を表している。新之丞は妻を失い、喪失感や孤独を抱えた状態で女に出会った。心の空白が生じているため普段の心理状態ではなく、女の婉曲的な誘いにも積極的に応じてしまったのである。欲望も少なからずあったかもしれないが、心の空白が女につけ入る隙を与えた主な原因であろう。彼の心理状態から考えても、異形の者に魅入られても仕方がない状況であった。

これに対して、伊織は心の空白を抱えていない。心身ともに健康かつ仏道を尊んでおり、彼の心は明鏡止水であったに違いない。それにも関わらず、女の誘惑に冷静さを保てず契りを交わしてしまった。その後も、女の来訪を拒まず交際を続け、彼は化生の者にとり憑かれる。仏道を貫く信念も、大胆な誘惑の前では脆くも崩れてしまうのである。

以上の考察から、「牡丹灯籠」と「紫女」の構成は似ているものの、男が女に出会う前の心理状態と女の口説き方は、大きく異なることが分かった。伊織の禁欲と女が色気を盛大に放つという極端な設定の付与に、西鶴の隠れた主張を見ることが出来る。

「紫女」の主題は、つまるところ、いどこで理性が働かなくなるか分からないということではないか。遁世を願い仏道に邁進する伊織でさえも、美女の誘惑にかたなしであった。

【図二】

男主人公	背景・心理状態	女の誘惑
新之丞	<ul style="list-style-type: none"> <li>・妻にをくれて</li> <li>・恋慕のほのほむねをこがし</li> <li>・ありし世の事共思ひつゞくる</li> <li>・経よみ、えこうして</li> <li>・つるに出てもあそばさず</li> <li>・門にた、ずみ立てうかれおるより外はなし</li> </ul>	<p>「たゞこよひの月にあこがれ出て、そゝろに夜ふけがた帰る道だにすさまじや。をくりて給かし」</p>
伊織	<ul style="list-style-type: none"> <li>・常精進に身をかため</li> <li>・仏の道のありがたき事おもひ入</li> <li>・三十歳迄妻をも持たず</li> <li>・世間むきは武道を立、内証は出家こゝろに</li> <li>・二十一代集を明暮うつしける</li> </ul>	<p>「枕といふ物ほしや、それがなくば、情しる人の膝がかりたい迄。あたりに見る人はなし、今なる鐘は九つなれば、夜もふかし」</p>

【明鏡止水】

欲望に負ける

【心の空白】

孤独に付け込まれる



本話では、伊織は女で理性を失ったが、これは物語世界だけにとどまらないだろう。日常生活においても、理性の狭間を突く突発的な出来事が起こることを、西鶴は遠まわしに描いているのではない。以上のように考えれば、一見ただの娯楽的読み物と見える「紫女」も、読者に、色欲には重々注意せよと述べているようにも思われて来はしないだろうか。

西鶴は教訓をほのめかすことなく、終始「紫女」を怪異譚に仕立て上げた。表面は女の恐ろしさを描きつつも、人間の欲望の前での弱さを映し出した物語なのである。

#### 四

「行末の宝舟」には、欲望を制御できなかつた男たちが登場した。欲に目が眩み、自ら寿命を縮めた親方たちを描いた滑稽譚であると同時に、親方たちの言動とそこから起きる悲劇を通して、読者に警鐘を鳴らすものでもあった。

「紫女」は、一見すると教訓性のない読み物であるが、思わぬ事で情に流される者が登場する。伊織は、「行末の宝舟」の親方たちと比べると理性的であり、悲運な出来事とは縁がないように思われる。しかし、女の誘惑という予想外の事態が降りかかり、理性の壁は崩れ落ちてしまう。情に流されていつ理性を失うか分からない点は、西鶴が読者に発した注意とも受け取れるだろう。

以上、二話の主題を考察したところで、『西鶴諸国ばなし』全体の性格を論じていくことにする。西鶴は、全国各地で見聞した話を基にして『西鶴諸国ばなし』を執筆した体裁をとっているが、実際

は書物や実際の事件を素材に用いて、新しい短編物語を創り上げた。短編の多くに共通する点は、怪異の出現と極端な性質をもつ登場人物たちである。この二つの特徴が顕著であるために、『西鶴諸国ばなし』は、怪異譚・滑稽譚の印象が強いのである。

加えて、『西鶴諸国ばなし』には怪異と滑稽だけでなく、注意喚起の面も存在する。この面は、登場人物の極端な性格に関係している。登場人物たちには、強調された人間の欲望や感情が付与されている。彼らの多くは予期せぬ出来事で理性を失い、結果として悲しい運命を辿る。彼らの極端な性格とその行動のために、結果的に教訓めたメッセージを物語は帯びるのである。『西鶴諸国ばなし』の教訓はおぼろげで、中世説話のように啓蒙色を宿したものではない。だが、それは決して押し付けがましくはなく、自然と読者の共感を引き出すのである。

西鶴は中世説話を意識して、物語の執筆にあたったわけではないだろう。もとより、読者を教諭す意図もなかつたのかもしれない。物語の地の文において、西鶴の主観が読み取れる部分はきわめて少ない。西鶴は物語や登場人物と一定の距離を保ち、客観的立場から物語を紡いだのである。

また、西鶴は自身の価値観、言い換えれば、自身の考える道徳や倫理、一般常識や社会通念を踏まえて、物語を描いたのである。ここで注意したいことは、西鶴は一線を越える登場人物たちに対して、積極的に容認も否定もしていないということである。理性を失った者には、相応の報いがあることを、現実には即しながら表現したのである。登場人物たちが悲運な事態に陥ったのは因果応報であると、言外に伝えているのかもしれない。面白い物語の創造だけで

なく、冷静に人間の本質を見つめ、現実社会に生きる人間の姿を明らかにしたのである。

西鶴は身分や性別、舞台を変えながら、様々な境遇や性格をもつ人物を造形した。加えて、そこに怪異の要素を織り交ぜることで、人間の奥底に潜む欲望が露になりやすい舞台を用意した。『西鶴諸国はなし』は人間の諸相を描くことに力点が置かれた、教訓性や滑稽さを内包する物語である。

ところで、『西鶴諸国はなし』の序文の結びに、「是をおもふに、人はばけもの、世にない物はなし」とある。この結びが物語全体を貫くものであることは間違いないだろう。化け物と同じように、あるいは化け物以上に、人間も不思議で奇妙な存在であると、西鶴は考えていたのかもしれない。

#### 引用・参考文献

- ・新日本古典文学大系76『好色二代男 西鶴諸国はなし 本朝二十不孝』（岩波書店、平成三年）
- ・新日本古典文学大系75『伽婢子』（岩波書店、平成十三年）
- ・近藤忠義「日本古典読本9 西鶴」（日本評論社、昭和十四年）
- ・後藤興善「古今著聞集」と西鶴の説話（『西鶴研究』第貳冊、昭和十七年十二月）
- ・笠井清「西鶴の剪燈新話系説話」（『年刊西鶴研究』第九号、昭和三十一年十一月）
- ・岸得蔵「海尊伝説と『西鶴諸国はなし』（『仮名草子と西鶴』所収、

- 成文堂、昭和四十九年。初出『国語国文』昭和三十二年十二月）
- ・岸得蔵「インド説話の東と西―西鶴の作品に触れて―」（『仮名草子と西鶴』所収。初出『国語国文』昭和三十六年七月）
- ・堤精二「近年諸国咄」の成立過程」（『近世小説 研究と資料』、至文堂、昭和三十八年）
- ・富士昭雄「西鶴の素材と方法」（『駒沢大学文学部研究紀要』第二十七卷、昭和四十四年三月）
- ・富士昭雄「諸国はなし」の方法」（『西鶴と仮名草子』所収、笠間書院、平成二十三年。初出『西鶴諸国はなし』、『国文学 解釈と鑑賞』三十四卷十一号、昭和四十四年十月）
- ・宗政五十緒「西鶴と仏教説話」（『西鶴の研究』所収、未来社、昭和四十四年。初出『文学』、昭和四十一年四月）
- ・宗政五十緒「西鶴諸国はなし」のあとさき」（『西鶴の研究』所収）
- ・宗政五十緒「西鶴諸国はなし」の成立」（『西鶴論叢』、中央公論社、昭和五十年）
- ・井上敏幸「紫女」の素材と方法」（『近世文芸』第二十二号、昭和四十八年七月）
- ・井上敏幸「忍び扇の長哥の方法」（『国語と国文学』昭和四十八年十二月）
- ・井上敏幸「西鶴諸国はなし」の素材と方法―卷一ノ一「公事は破らずに勝つ」―」（『静岡女子大学研究要』第八号、昭和五十年二月）
- ・井上敏幸「西鶴諸国はなし 解説」（新日本古典文学大系76『好色二代男 日本諸国はなし 本朝二十不孝』）
- ・江本裕「西鶴諸国はなし」と伝承」（『西鶴研究―小説篇―』新

典社、平成十七年。初出『西鶴諸国はなし』―伝承とのかかわりについて―、『伝承文学研究』第十七卷、昭和五十年三月）  
・野田寿雄氏「西鶴諸国はなし」（『古典とその時代Ⅷ 西鶴』所収、三一書房、昭和三十三年）

〔付記〕

本稿は、平成二十六年度山口大学人文学部国語国文学会での口頭発表に加筆修正したものである。席上及び、発表後に諸先生方から貴重なご指導、ご意見を賜った。この場を借りて深く感謝申し上げます。

（はたもと・あやの）